

# 紫野

平成26年  
1月1日発行  
第44号



大本山大徳寺



ないでしょうか。「節目」に必要なとされるのは人間自身の「節度」だと言えるのです。人間は常に同じ姿勢でいる事は難しいのです。いつの間にか歪んでしまっていて、気づく事さえないかも知れません。ですから新年を迎える事の意味は、改めて自分の姿勢を質す、つまり問い直す事にこそあるのです。それは仏教徒としての姿勢も同じ事です。いつの間にか形だけになっ

こんな単純な事実も世間はもちろん、医療界でもあまり知られていません。

さて、認知症終末期になり嚙下困難に陥ると、施設側から胃ろうを勧められることがよくあります。胃ろうは病院だけが好んで造るだけではありません。施設側からも食事介助の手間が大変なので胃ろう造設を要望されるケースが増加しています。胃ろうは当初は確かにいいのです。胃ろうで栄養状態が良くなり床ずれが治る。するとまた口から食べられるようになるという好循環に。しかしいつかはまた食べられない時期が来ます。結局、一旦始まった人工栄養という延命治療は、もし本人や家族が中止したいと願う時期が来ても、誰も止められないのがいわゆる胃ろう問題の本質です。

す。「私も死んだらみんなにこうして見送ってもらえるんだ」、「ここは本当に最期まで面倒を見てくれる場所なんだ」と、怒るところか安堵したと聞きました。しかし入所者が肺炎になれば、即刻救急車で病院に入院させる施設が大半です。私が考えた理由は三つ。まず、施設には医療が無いので何が起こるか分からず不安なので単純に、怖い。だいいち重症者のお世話をする人手が慢性的に足りない。さらに万一結果が悪かった場合ご家族から訴えられる可能性がある。そんなこんなで、施設から病院への救急搬送はよくあることなのです。もし延命処置に積極的な病院に入ったら最後。フルコースの延命治療を受けることになります。延命治療を望む人には喜ばしいでしょ

日本では不治かつ末期と判断された時、本人の意思が書面等で明示されていれば中止しても構わないという法律がありません。そのために施設で不治かつ末期となった時に、平穏死を望んでも叶わない傾向にあります。

東京の清水坂あじさい荘という特別養護老人ホームは看取りに積極的な施設です。入所者が亡くなると正面玄関から出て行きます。昔から病院では亡くなった人はこっそり裏口から出るのが慣例です。そんな常識を覆すかのように御遺体をセレモニーとして正面玄関から送り出すことは最初は大変勇気のいる行為だったでしょうね。しかしそれを見守った入所者さんはショックを受けるどころか、むしろ安心されたそうで

うが、望まない人にとってはとても可哀そうな終末期となります。

考えてみれば介護施設ほど天国に近い場はありません。一見元氣に見えても、いつ逝っても不思議では無い。そんな場にいるも死は遠い非日常。その現実には違和感を覚えるのは私だけでしょうか。しかし中には清水坂あじさい荘のような施設もあることを知っておいてください。平穏死できる病院や施設が徐々に増えていくことを報告します。

以下次号に続く